

つたのは通信

特定非営利活動法人 としま遺跡調査会

区内最大の弥生集落

駒込一丁目遺跡（駒込 1-5-1 集合住宅地区）の発掘調査



駒込一丁目遺跡は区内最大の弥生時代集落址であり、今回を含め、これまで合計 20 軒の竪穴住居址が確認されています。今回の調査は、2012 年 3 月 6 日～ 14 日に行なわれました。

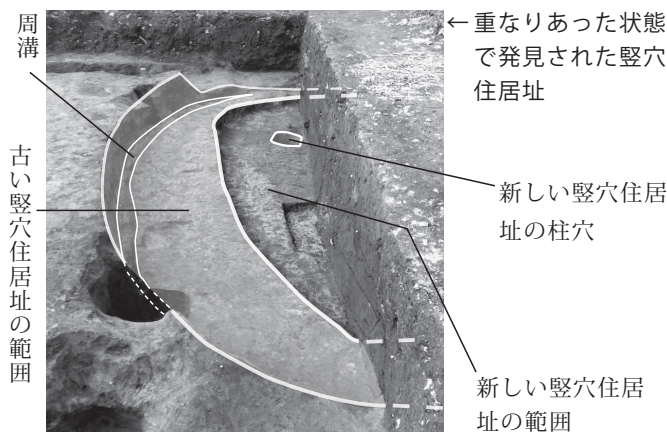
ところで、日本考古学史上における弥生土器の初めての発見は、1884（明治 17）年、現在の文京区弥生町遺跡でなされました。当時、この土器は東京帝国大学の研究者達によって、発見された地名にちなみ「弥生式土器」と名付けられたものの、この分野の研究は遅々として進みませんでした。それから 12 年後の 1896（明治 29）年 3 月 15 日、現在の豊島区駒込一丁目に住まいしていた考古学者、^{まいだ そうじろう}蒔田鎗次郎は、偶然自宅の庭で弥生土器を発見します。彼は、この事を「弥生式土器発見について」という論文に著しますが、これは考古学史上初めて弥生土器を科学的に分析した論

文として、現在も高く評価されています。また、この論文は「弥生式土器」の名称が広く学界に普及したきっかけともなっています（なお、現在では“式”の字を除いた「弥生土器」の名称が一般的です）。

次ページへ



さて、今回の調査地点は、蒔田が明治年間に発掘調査を行なった地点からわずか 50 m ほどに位置しています。100 m に満たない狭い調査範囲ながら、弥生時代後期の竪穴住居址が実に 3 軒も発見されました。しかも、うち 2 軒は新旧の竪穴住居址が重なりあった状態（これを、遺構の「重複」・「切り合い」などと呼びます）で発見されました。これは、古い時期の竪穴住居が放棄され埋没した後、しばらく経って同じ様な場所に、別の竪穴住居が造られたことを示しています。こうした事例は必ずしも珍しいことではありませんが、駒込一丁目遺跡で確認されたのはこれが初めてです。（宮川和也）



発掘調査情報

武家地から鍛冶関連遺物や植木鉢が出土

巢鴨遺跡の発掘調査は、2012 年 2 月に実施されました。今回の調査地点は、J R 巢鴨駅南口ロータリーからすぐのところ、白山通りに面した一角に位置しています。

ここは文献資料によれば、幕末頃の旗本屋敷であった範囲にあたります。今回は、比較的大型の採土坑やごみ穴、地下室などといった遺構が発見されました。ごみ穴からは、当時のゴミ（＝遺物）が多量に出土しています。中でもひときわ目立つのは、植木鉢の量の多さです。その量たるや、おそらく旗本個人の趣味の範囲を超えています。加えて、鍛冶屋が使う道具である鞆羽口や、その作業で生じる鉄滓（てっさい）といった遺物も数多く出土しています。こうした遺

物の内容は、むしろ植木屋や鍛冶屋といった方が相応しいかもしれません。本格的な分析はこれからですが、文献資料には表れない、旗本屋敷のユニークな実態が明らかになるかもしれません。（宮川和也）



↑ 採土坑の埋没過程を調べている様子

↑ 発掘調査風景（調査区南側）

発掘調査情報

染井遺跡の東端地を調査



↑ 調査区と周辺

染井通り

1 ～ 2 月に実施した調査地点は、本郷通りと染井通りに挟まれた三角地に所在し、道を挟んだ東方には大名屋敷であった六義園（りくぎえん）が位置します。本地区は江戸時代には、百姓町家あるいは植木屋であった場所にあたると考えられます。

発見された遺構は、江戸時代以降の植栽痕（えなつば）や掘立柱建物址（まいのういこう）、小規模なごみ穴（しょうきょうごみくわ）、（胞衣壺）埋納遺構（えなつばまいのういこう）などです。ほとんどの遺構は、幕末前後のものであることがわかりました。その中で、興味深い遺構が植栽痕です。発見された植栽痕は調査区の南東隅、つまり染井通りが本郷通りから分岐する地点の脇から発見され、かつ比較的大きな木であったと想定されます。ここでは立地などを考慮し、栽培などを目的とした植樹よりも、ほかの意図の可能性がありそうです。想像を逞しくすれば、この地が植木の里「染井村」への入口という場所柄から、目印のような意味合いのシンボリックツリーが植えられていたとみることができます。土地が開けている中（遺構密度が低く仕切り施設がないため）で一際目立つ樹木が通り入口の脇に 1 本、そんな光景が目に浮かびます。（高木翼郎）

発掘調査報告書の新刊紹介

新たに5冊が刊行されました。染井遺跡で4冊、雑司が谷遺跡で1冊となります。弥生時代の墓の年代に関わる予察や津藩藤堂家屋敷地内の空間構成など、それぞれ執筆者による興味深い報告がされています。



< 豊島区教育委員会発行 >

『染井XXIII』 豊島区埋蔵文化財調査報告 35 染井遺跡（旧丹羽家ひろば整備地区）の発掘調査



現在、区立公園となっている“門と蔵のある広場”は、江戸時代は染井を代表する植木屋のひとりである丹羽茂衛門家の敷地でした。

2010年に行なわれた発掘調査では、江戸時代の植木屋を色濃く示す遺構や遺物が数多く発見されています。特に植木鉢は磁器製をはじめ、薩摩焼の甕を転用したもの、近代に廃業したときに廃棄したとみられる瓦質植木鉢などが見られます。考察では近世における丹羽家

の敷地範囲に焦点をあてつつ、丹羽家に伝わった植木鉢類も紹介しています。このほかに染井遺跡をわかりやすく解説したカラーページもありますので、ぜひご覧ください。（小川祐司）



丹羽家の植木鉢



巻頭カラー頁

< 豊島区教育委員会発行 >

『染井XXIV』 豊島区埋蔵文化財調査報告 36 染井遺跡（ソシエ駒込第二地区）の発掘調査



本書は、ソシエ駒込第二地区の発掘調査成果を掲載しています。本地区は伊勢津藩藤堂家の大名屋敷の一角に当たります。

本調査では、溝や塀などがみつかり、調査区西隣りのパークハウス駒込桜郷地区（豊島区遺跡調査会2010『染井XXVII』）で検出している塀や溝へと連なる、長大な区画施設が調査区を跨いで東西に延びていた事実が判明



発見された並行する2列の塀址

しました。また発見された溝を境に、調査区の南側では植栽痕が密集しており、庭園内でも雑木林のような空間であった可能性が考えられます。なお植栽痕については、

本書の中で新たな検討と分類を試みています。近世植栽痕研究の一助になればと思います。

また近世のみならず、縄文時代から中世にかけての遺物も少数ながら出土しており、近世以前の染井を考える上でも重要な発見であったと言えます。

（榎本邦人）

< 豊島区遺跡調査会発行 >

『雑司が谷VI』 豊島区遺跡調査会調査報告 21 雑司が谷遺跡（M・K・Cビル地区）の発掘調査



本地区は雑司が谷遺跡の外縁部に位置して、西側を明治通りが南北に走行しています。近世の本地区は、史料の検討から下高田村の年寄であった、新倉四郎右衛門家ないしは新倉金太郎家の所有地の一画に比定されます。

発掘調査の成果では、18世紀後半以前に繁茂していた植栽の状況を見出し、検出された建物跡や地下室を含めた遺構群や出土遺物の内容を勘案すると、18世紀後半～19世紀前半頃には本格的な土地の利用が始まったと推測されます。また、これ以降

の明治時代にかけて、連綿と生活空間であった様相を捉えることができました。それは新倉家が、19世紀初めから屋敷田畑の譲渡によって土地集積を強め、幕末期には村内で最高生産高者に成長していく状況に呼応するかのようです。

この他では、縄文時代前期の土器や、区内では初の発見事例となる古墳時代の埴輪片が出土しています。（高木翼郎）



調査区の全景

< 豊島区遺跡調査会発行 >

『²⁵ 染井 X X V』 豊島区遺跡調査会調査報告 30 染井遺跡（ディアクオーレ駒込染井地区）の発掘調査



本書は、染井遺跡の中でも現在の染井通りの南側沿いに位置するディアクオーレ駒込染井地区の発掘調査成果を収めたものです。

発掘調査の結果、伊勢津藩藤堂家の屋敷が存在していた江戸時代には、染井通りの軸線に沿うように地下室が並び、また、10 m 以上の長さの生垣が設



多くの地下室と井戸を発見

けられていたことがわかりました。さらに、それより前には谷を埋め立て、起伏のある地形を平坦に造成していることもわかりました。

関東ローム層中からは、旧石器時代の石器・礫群が発見されました。染井遺跡では、数少ない検出例であり、谷田川流域での新たな知見が得られた調査となりました。（山崎吉弘）



旧石器時代の石器出土状況

< としま遺跡調査会発行 >

『²¹ 染井 X X I』 としま遺跡調査会調査報告 9 染井遺跡（S T ハイム地区）の発掘調査



S T ハイム地区は、J R 駒込駅の東側に位置しています。本地区最大の特徴は、弥生時代の方形周溝墓が発見されていることでしょう。周辺では本地区も含めた約 4 基が確認されています。ここから南へ 100 m には弥生後期の集落址である、駒込一丁目遺跡が位置しており、これらはその墓域とも考えられます。しかし、問題は遺物がほとんど出土していないことと、これらの平面形態にありま



弥生時代墓の周溝断面

す。広く南関東では、時期や地域によって方形周溝墓に様々な形態のあることが知られていますが、染井遺跡の事例は中期に主体的とされる、いわゆる「四隅切れ」タイプにあたります。このため平面形態から言えば、中期の可能性も否定できません。なかなか明確な結論を下せる状況にありませんが、本書では、以上を宮ノ台式期（中期）とする仮説を提示しています。はたして中期の方形周溝墓なのか、或いは後期のものなのか、この問題は今後の発掘調査によって明らかとなるかもしれません。（宮川和也）

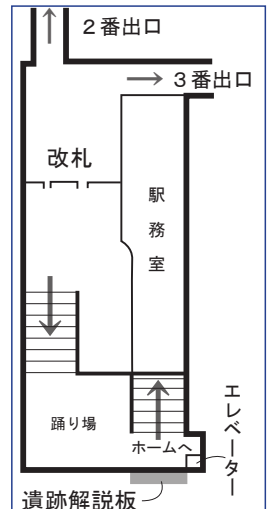
※報告書には頒布できるものがあります。詳しい頒布方法につきましては、豊島区教育委員会発行分は豊島区行政情報係もしくは文化財係へ、それ以外は当会までお問い合わせ下さい。

多くの図書を寄贈いただきました

昨年度（2010 年 10 月～2011 年 9 月）に、多くの機関や団体・個人の方から図書をご寄贈いただきました。以下に記して感謝申し上げます。（五十音順、敬称略）

青森市教育委員会、新垣 力、有田川町教育委員会、石井隆太、一般社団法人大田観光協会、大八木謙司、岡三リビック株式会社、小川 望、株式会社島田組、株式会社 C E L、鎌倉市教育委員会、かみつけの里博物館、河内長野市教育委員会、川口市教育委員会、クオリ、黒尾和久、甲府市教育委員会、神戸市教育委員会、国分寺市遺跡調査会、国分寺市教育委員会、国立ハンセン病資料館、小平市教育委員会、さいたま市教育委員会、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所、財団法人東京都埋蔵文化財センター、財団法人とちぎ生涯学習文化財団、清水 香、下関市立考古博物館、宗教法人日蓮宗國土安穩寺、宗教法人曹洞宗本光寺、昭和女子大学国際文化研究所、白峰 旬、杉並区教育委員会、関口慶久、瀬戸市教育委員会、台東区教育委員会、中央区教育委員会、鶴ヶ島市教育委員会、十日町市博物館、東京大学埋蔵文化財調査室、東京都教育委員会、同志社大学、同志社大学歴史資料館、徳島市教育委員会、豊島区教育委員会、豊島区立郷土資料館、栃木県教育委員会、豊田市教育委員会、豊田市郷土資料館、日本女子大学、ニューサイエンス社、橋口定志、鳩ヶ谷市教育委員会、鳩山市教育委員会、飯能市遺跡調査会、ふじみ野市教育委員会、別府大学史学研究会、まいまい京都実行委員会、水戸市教育委員会、三芳町教育委員会、両角まり、横浜都市発展記念館、米沢市教育委員会、NHK

“ 移りゆく雑司が谷のまちなみ ”



駅構内案内図

この春、東京地下鉄副都心線雑司が谷駅構内の遺跡解説板の展示替え（兼作成：委託事業）が完了し、現在新しい解説板がご覧になれます。このたびは“移りゆく雑司が谷のまちなみ”と題して、雑司が谷が近世から近代へと、どのように変化してきたかを遺跡から追っていきます。

江戸時代の雑司が谷地域は、鬼子母神堂を中心に江戸郊外の実業地として隆盛を見せ、参道沿いの町々には料理屋や茶屋が数多く立ち並びました。こうした行楽地が名所となると、名物や名店もあらわれます。発掘調査では、「江戸高名会亭^{えどこうみょうかいてい}」にも描かれた料理屋である“茗荷屋^{みょうがや}”の名前が描かれた酒罎などが出土しています。また雑司が谷の北に位置する御鷹部屋御役屋敷から出土した木製の納豆容器の蓋には、南に近在する本立寺^{ほんりゅうじ}の名前が記されていました。江戸時代、納

豆と言えば塩納豆を指し、本立寺をはじめとして多くの寺院は時節の贈り物のほか、寺の名物として販売していました。

明治時代になると、鬼子母神堂の参詣は下火となり、静かな郊外となっていきます。しかし1923（大正12）年の関東大震災と1925（大正14）年の王子電車開通を契機として、雑司が谷地域は大きな変化を迎えます。この頃の遺跡からは大量の飲食器が出土し、多くの人々が暮らしていたことがうかがえます。なかには洋食器やフランス瓦（ジェラル瓦）も見られ、洋風の建物で食事をするような家もあったので

しょう。
2008年の副都心線開通によって、80年ぶりに新しい電車が通るようになりました。これからの雑司が谷はどのように移り変わっていくのでしょうか。（小川祐司）

としま未来文化財団 文化カレッジ

遺跡講座の受講生を募集しています

最近までの発掘調査で、豊島区内の原始・古代・中世各時代の様子が次第に明らかになってきました。豊島区周辺の様子を交えた最新の成果を、専門の研究者がわかりやすく講義します。

4回講座のうち、1回はフィールドワーク（実地踏査）を実施します。フィールドワークでは、豊島区の遺跡と深く関わる、北区や荒川区の遺跡を巡る予定です。

→前年度は弥生町から駒込を歩きました



遺跡講座

締め切りしました

「原始～中世のとしまの地域を知ろう」

【講座日】 第1回5月26日（土） 第2回6月23日（土）
第3回7月28日（土） 第4回9月22日（土）

【時間】 午後2時～4時（2時間）

【会場】 豊島区立勤労福祉会館 6階第7会議室

【定員】 20名

【費用】 2,900円（保険料含む・交通費別途）

【申込方法】 4月18日までに往復はがき送付か窓口にて申込

【問合せ先】 豊島区立勤労福祉会館
Tel 03 - 3980 - 3131
※詳細は「広報としま」や、としま未来文化財団ホームページでご確認下さい。

【講師】 橋口定志、成田涼子、宮川和也ほか

書籍紹介

かつての職人に思いを馳せて

原田多加司 著 『屋根の日本史』

寺院の仏閣、神社の社殿や民家など、なにげなく建っている日本の建造物には長い歴史に裏打ちされた重厚な文化が存在しています。その魅力へと誘ってくれるのが、今回ご紹介する『屋根の日本史』です。

本書は、^{ひわだぶ} 桧皮葺き師・^{こけら} 柿葺き師の10代目原田真光を襲名し、重要文化財など多くの古建築修理にかかわってこられた、原田多加司氏による著書です。古代から近代までの様々な史料を用い、日本建築を屋根葺き職人ながらの視点でまとめられています。

寺院などの建物は、建物の構造が参拝者の印象に影響を与えることを鑑みて屋根構造がデザインされていることや、大陸から輸入された建築技術を日本の気候・風土に合わせて順応させてきた歴史などが語られています。私は、建物が単にそこにあるだけのものではなく、職人たちの様々な闘いの結果に生まれた工夫の賜物であることを知りました。発掘調査では、日本の^{かすがい} 場合、建物そのものが出土することはありませんが、礎石や釘や鏝、瓦など建物の残骸は発見されます。考古学では、そのすべてを復元することはできずとも、礎石などからは、かつて存在した建物の平面プランを復元することが可能です。その際には、これは建物に限ったことではありませんが、単に作業的に復元するのではなく、それを建てた職人さんの存在も思いながら、かつての建築の文化を探ることが肝要だと改めて考えさせられました。

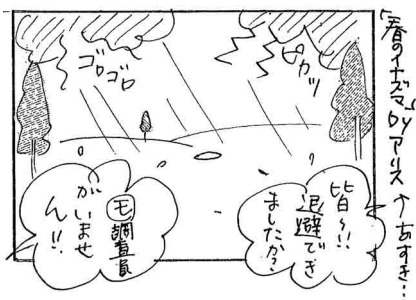
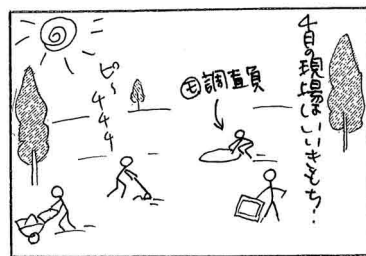
本書は、寺院・神社のみならず日常的な身の回りの建物を再認識させ、その土地で培われた文化の存在を気付かせてくれる一冊です。建築専門用語などやや難しい部分もありますが、本書を読んだ後には、建物の見方が一変することでしょう。(山崎吉弘)



原田多加司著
中公新書 1777
中央公論新書社
定価：840円

かんしおれ
⑦ 調査員

春の嵐に〜♪ ⑫



※土坑：墓穴の跡

たくましい(?) ⑦調査員にも嫌いなものがあるとは……。寒すぎず暑すぎずで、春の発掘調査は良いものです。緑も芽吹き始めて気分も上がりますね。

【編集後記】

●今年の桜の開花は遅いですね。待ち遠しかった桜ですが、発掘調査では少々厄介者。なぜならば、散る花びらが写真撮影の邪魔になるからです。清掃が大変!

●雑司が谷まちかど遺跡ミュージアムは4月25日までです。副都心線雑司が谷駅構内の遺跡解説板とともに見学されると、より一層理解が深まるでしょう。(翼)

編集・発行



特定非営利活動法人
としま遺跡調査会

〒170-0002 東京都豊島区巣鴨3-8-9 巣鴨複合施設201号室

Tel・Fax 03-3915-6962

E-mail tics389@a.toshima.ne.jp

ホームページアドレス: <http://www.toshima-iseki.org/>

「つたのは通信」の由来：蔦は大きな樹ではありませんが、生命力が非常に強い植物です。この蔦の葉が周囲の樹木や建物につたい茂るように、多くの人に遺跡の楽しさ、大切さを知ってもらいたいとの願いを込めて会報の名としました。また、染井遺跡を代表する大名屋敷である津藩藤堂家の家紋としても、馴染み深い植物です。

題字：湯澤和子

ロゴデザイン：石原幸

イラスト：千葉弘美